

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●九州大学理学府

「先端研究者と高度専門家育成の理学教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

プログラムへの学生の配属に偏りがあった。本教育プログラムにおけるフロントリサーチャー育成プログラム(FR)とアドバンスサイエンティスト育成プログラム(AS)への配属は、修士課程1年の後期開始時に行う。当初目指していた定員の振り分けは、五年一貫制のFRが約25%、ASが残りの75%というものであったが、年によりばらつきはあるものの、現実のFRへの配属希望は15%程度に留まっている。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

修士課程1年の後期開始時という配属時点では、大半の学生が原則五年一貫のフロントリサーチャー育成プログラム(FR)を選択することにより必ず博士後期課程まで進学することを決断するのに躊躇し、暫定的にアドバンスサイエンティスト育成プログラム(AS)に入っておこうと考えているためだと思われる。また、FRの大半のプログラム科目が必修であるため負担が相対的に大きいのに対し、ASの場合はいくつかの中から選択できる、選択必修の形式を取り、柔軟性があることも原因の一つであろう。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

学会参加費や海外派遣補助などの金銭的支援をフロントリサーチャー育成プログラム(FR)に対しより手厚くするなど、FRの魅力をより高める工夫をしたが、大きな変化は見られなかった。必修単位数を両プログラムで揃えるなどカリキュラムの改善などが必要と考えられる。